Japanese Association for Religious Studies

を「宗教」という共通の次元でキリスト教と比較し、彼らと対等の立場で対話するということはなかった。諸宗教に通底する宗教的哲学的真理を見いだそうとしたピコの思想は、後の比較宗教学のプロトタイプと言いうるものであるかもしれないが、そこで見いだされた諸宗教に共通する真理とは、やはりキリスト教的なもの以外ではあり得なかった。ここにルネサンスという時代を象徴するピコの意義と限界を認めることができるのではないだろうか。

西欧における仏教理解

――認知科学におけるその可能性と問題点――

司馬春英

最初にF・ヴァレラの認知科学の要点を概観し、彼の独自な立場形成に際しての仏教思想からの影響を確認する。ここでは「表象」主義的「認知」観の仮象性が露呈される。次いで、中観・唯識の対論を瞥見し、この対論を仮象批判そのものの立脚点をめぐる相互批判として解釈する。最後に、以上を踏まえて、自らの仮象性の自覚化はいかにして可能かという問いを提起して、宗教間対話という営みを問い直す契機としたい。

一　F・ヴァレラの認知科学と仏教――観察者という仮象と「空」

ヴァレラの「イナクティヴ・アプローチ」による「認知」の定義は、「認知とは表象ではなく、身体としてある行為なのであり、我々が認知する世界は所与のものではなく、我々の構造的カップリングの歴史を通して産出されるものである」というものである。ここから読み取れるのは、第一に、観察者の立場とそこから独立した所与の世界という図式を前提とした「表象」論的「認知」観、つまり近代物理学モデルを支える“Metaphysik”への批判であり、第二に、身体的生命活動に定位しつつ、あらゆる現象をシステムの作動へと回収し、システムそのものに対して意味づける自己回帰的な“Metabiologie”の提起である。彼の中観学派への着目は第一の観点と深く関わる。彼はアビダルマにおける「人無我」をコネクショニズムにおける創発特性と比定し、そこではまだ「法無我」が主題化されていない点について、自存的世界の前提と表象主義の残滓であるとする。「法無我」を説く大乗中観派に至って初めて、自存的世界という前提を払拭したイナクションの立場に達するのだ。「縁起」思想は彼にとって、「所与の外的世界の回復としての認知（実在論）と、所与の内的世界の投射としての認知（観念論）という前門の虎と後門の狼に挟まれた中道の認識論」を可能とするものであった。第二の観点は、彼自身は明示していないにせよ、唯識思想、特に阿頼耶識論と深く関わる。私見では唯識論は正に“Metabiologie”の哲学である。「種子生現行・現行熏種子・三法展転・因果同時」とは、阿頼耶識の身体的認知活動が「プロセスの結果がプロセスそのものとなり、操作そのものが自己に回帰する」自己組織的システムとして営まれていることを示している。生命の来歴が世界を行為的に産出

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

するのである。

二　中観・唯識の対論――仮象批判の立場性の問題

"Metaphysik"の仮象を露呈したのが中観だとすれば、"Metabiologie"を積極的に提示したのが唯識だと言えよう。しかし、両派の間には仮象批判の立場を巡る熾烈な論争があった。中観は、唯識が「法空」の立場にいながら「識」を立てる矛盾をつき、仮象批判を促してくる働きを存在者化することによって、新たな仮象に取り込まれていることを批判する。それに対し、唯識派は、仮象批判が為されるためには、仮象が生起する場を確保せねばならず、それ無しに否定を繰り返すことは方向性と願を失った「悪取空」であると中観派を批判する。両派ともに仮象批判そのものの仮象性を見極めている。

三　宗教間対話という営み――自らの仮象性にいかにして気付き得るか

相対主義と原理主義が二極分化する現状の中で、宗教間対話の可能性を探るためには、以上に見た二重の仮象に陥る危険性を自覚化していく道を共有しなければならない。原理主義的仮象を批判するのは容易だが、その際、相対主義もまた観察者の立場という仮象に囚われていることを見逃すわけにはいかない。それはあらゆるパースペクティヴを承認しているかのような観を呈しながら、自らが「脱パースペクティヴ」という仮象に陥っていることに気付かないことが多い。それでは、原理主義的仮象を批判し得る地平には到底立ちえないであろう。

イスラームにおける宗教間対話の理論

松本耿郎

イスラームはゾロアスター教、ユダヤ教、キリスト教の後に生まれた宗教であり、しかもそれらの所謂既成宗教が行われている地域において受容されていった宗教である。したがって、イスラーム誕生の当初からイスラームはこれら既成宗教と対話することが求められていた。『コーラン』の第五章四十八節から五十三節の言葉はイスラームが宗教多元主義を前提とした教えであることを示している。ただし、宗教多元主義（religious pluralism）の概念でどのような状態が意味されるのかが問題である。勿論、この場合の宗教多元主義がイスラームの世界観の中に複数の宗教が包摂されるというイスラーム至上主義のものであるのか、あるいはイスラームを一つの世界観とみなして、複数の世界観のうちの一つとして他の諸宗教と並存するものであるとする相対主義的立場であるとするのかは個人の立場により異なる。前者を包摂主義的立場、後者を相対主義的立場とするならば、この両者の傾向はイスラームの歴史を通じて対立しながら存在してきている。実は、この両者の対立はイスラーム思想の歴史においても深刻な問題を引き起こしていた。互いに相手の立場を異端である、瀆神であると非難しあうことがしばしば起こったからである。宗教間対話は重要であるが宗教内部の対立の克服と対話の実現も大切である。

NII-Electronic Library Service